

昭和五十五年四月二十八日 「和敬セミナー」

「北極圏犬ゾリ踏破の探検家・植村直己先生を囲んで」

探検家 植村直己先生

塾では、このたび塾生の人間形成の一端として、

(一) 講師の馨咳に親しく接することにより、塾生に対し向上意欲の喚起と人間的な成長の目標を与え、

(二) 小グループの討論を通じて、現代の社会及び人生についての問題意識を高めるとともに、思考の基礎を形成することを目標とし、

(三) 塾生が自ら主体的に相互の切磋琢磨に励む雰囲気を形成するための一助とする目的をもって「和敬セミナー」を開設し、去る四月二十八日、別記の要領により北極圏犬ゾリ踏破の探検家・植村直己先生を囲んで、その第一回を開いた。

●司会 各分野の一流の方を招いて、少人数で、ある話題について話し合い、その講演者からじかに深いものを汲み取っていこうという企画から生まれました和敬セミナーの記念すべき第一回を、探検家として有名な植村直己先生をお迎えして、

今日ここに開くことができました。

さて、この和敬セミナーでは、ここに集まっております各寮代表十五名が、先生を囲みまして、いろいろな話題、お聞きしてみたいことなどを活発に自由に討論してもらいます。そして講師の先生からじかに、その考え方・生き方を学んでいこうと思っております。聴講される方には、後で質問の時間を設けております。申し遅れましたが、私は本日の司会を務めさせていただきます、西寮・早稲田大学四年の吉原です。どうぞよろしく。(拍手)

先ず、ここで本日の講師であります植村先生のご略歴を紹介いたします。先生は、昭和十六年、兵庫県にお生れになりました。明治大学にお入りになり、山岳部に入部され、山に親しまれるようになりまして、在学中及びご卒業後、ヒマラヤ・モンブラン・キリマンジャロ・エベレストなど、名山の登頂に成功され、またその間アマゾン川筏下りや北極圏単独犬ゾリの旅、グリーンランド縦断などをされて今日に至っております。

ところで、本日の討論会の進め方は、まず二十

分くらい先生のお持ちいただいたスライドを見ながら、先生よりお話をうかがい、その後約二十分くらい先生に講演をお願いいたします。講演の後、先生を囲みまして実際に討論に入りまして、セミナーが終わります十五分くらい前に、聴講の方々からの質問を出してもらいます。前置きが長くなりましたが、本日の講師の植村先生をご紹介いたします。(拍手)

植村先生の挨拶

●植村 みなさん、今晩は。(塾生 今晩は。)

勉強の後でちよっとお疲れだと思いますが、逆に食事の後でちよっとくつろいだときに、これから私の旅の話でも聞いて下されば、幾分消化もよくなるのではないかと思います。

第一回和敬セミナーということで、私をここに呼んで下さったわけなんですけれど、私は恥ずかしいことに、学校でも卒業後も何一つとして競争に勝ったことはありませんでした。皆さん方は難しい高校をまず突破して、さらに大学に、そして

この和敬塾に人を追い抜いて、皆さん方の地位を勝ち取られたと、そういうふうに思います。私からすれば、まず二人よれば失格だというのが私であります。非常に恥ずかしいのですが、みなさん方一人一人が向学心に燃えている中に、私の大学生活は皆さん方と全く対照的な生活をしておりました。まず授業にでていませんでした。大学に入りましたのも、競争率が低かったから入られたような状態でありまして、卒業しましたのも、授業に出ていなく、学校の先生に何とか単位をもらい、卒業したわけでありまして。こういったわけで、皆さん方とこれから討論ということ、多分いろいろ質問されるわけじゃないかと思えます。まあ、私も覚悟してまいりました。まな板の上の鯉という感じであります。

皆さん方の年代は、ちょうど二十代か、二十三か四ですか（笑い）。まあ、そういった面で私は、三十九歳です。皆さん方よりも、無駄飯かもしれませんが、多く食ってきております。特に大学を出てから十六年になりますが、今までに一度も定職についたことがありません。しかしもし何か秩序が乱れた時には、少なからず、みなさん方よりも耐えぬく力はあるのじゃないかと思っております。この十六年間といえますのは、私にとりましては、社会から遠ざかったような感じで、自分のやりたいうことをずっとやってきました。このことだけは、みなさん方に心を大にして申せるんじゃないかと

思います。

これから、時間を頂いた中で、自分のやってきた行動——どういった心境で、どのようにしてやってきたかというように、何を少しお話させてもらおうと思っております。まあ、私のやってまいりましたことは、先ほど紹介されましたわけでありまして、山から始まりまして、川をやりましたり、極地をやりましたり、稚内から鹿児島まで三千キロをテクテク歩きましたり、何をやっていくのか解らないという状態であります。今日は無職にもかかわらず、ここに呼ばれましたときには「先生」と呼んで下さいました。最初呼ばれました時は、ギクとしましたのですが、まあ私のことは、職業などなんでもいいという、自分ではつきり申しますと、放浪家といった感じでありまして。これから先、何ができるかという、私にも解りません。でもみなさんが個々の目標をもっていらつしやいますように、私にも職業はないかもしれません。自分の夢というものは、やっぱり持っております。そういうものを自分の中で追っていきたいというわけであります。そういうことからしまして、私のように頭の悪い者にも、みなさん方——人を追い抜いて勝ち抜いてきた皆さん方と同じように、どんな生活をしようかと、我々は生きる権利というものはあるのではないかと思えます。そういう意味で、私がやってきましたことを、こういう生き方もあるのだというわけで、

これから聴いていただければ有難いと思っております。

前置きは、さておきまして、ここに二十枚ばかりスライドを持ってきております。これは最近、二年前になつてしまつたのですけれども、北極点とグリーンランドを独りで走りましたときのスライドであります。これを簡単に説明させて頂きました上で、今少し話をさせてもらおうと思っております。じゃ、すみませんが、スライドの方、順次お願いします。（拍手）

植村先生のスライド説明

(一) 北極点、グリーンランドを犬ゾリで約四千里走りましたわけですが、これが私が走りましたコースであります。赤い線が犬ゾリのコースです。一部ちよつと訂正せねばなりません。北極点からグリーンランドの北部への赤線は、実は私は飛行機で帰ってきております。予定ではこのコースの赤線を走るつもりでありましたが、氷の状況が悪くて走れませんでした。赤線の出発点アライトから北極点まで直線にして約八百キロです。コースにしますと千キロは越していると思えます。グリーンランドの縦断は内陸をすつぱりと真二つに割つてますが、これが三千キロありました。二年前の三月五日に十七頭の犬で出発しております。そして五月一日に極点到達、それからグリーンランドの最北端には五月十一日に入つて、そこから

到着地点のナルササークには八月二十二日に入つて終了しております。

(二) 犬ゾリと申しますと、我々とは全然関係のないものでありますけれども、極地に入ってきたすと、我々と同じ顔をしましたエスキモーの人達がいいます。アジア系の人たちであります、彼らは犬ゾリをあやつつて北極海沿岸で狩猟生活をしております。こういったエスキモーは現在もなおグリーンランドの北部では、犬ゾリをあやつつて狩猟をやっております。彼らの使っている犬や装備を使つて私は挙行しました。犬ですけれども、ハスキー犬といつております。別名エスキモー犬ともいつておりますが。だいたい三十キロから四十キロくらい、大きいので四十五キロくらいあります。秋田犬に似ており、胸巾が広く、足が太い。私の方の着ているものはトナカイの防寒具、アザラシの長靴、白クマの半ズボンという感じであります。ソリの前に扇状に犬をつないでおります。一頭だけリーダー犬を先頭に出しているわけでありませぬ。

がどんどん割れたり、くつついたり、盛り上がりまして、氷丘をつくつていっているわけでありませぬ。まあ、こういった中で、犬ゾリでジグザグにコースをとつて走つております。ある所ではこのようにして、氷丘を越えなくてはいけないというようなものであります。北極海の氷は決して湖にあるような平らな氷ではありませんでした。今回の最低気温はマイナス五十一度を出発の日に記録しております。前半はだいたいマイナス四十度前後でありました。極点に到着した時点では、マイナス二十度前後であります。マイナス二十度前後といひますと、氷が割れますと、後張つてくれませんでした。そういったことで犬ゾリがこれ以上引き返すことがまあ不能になつてしまつたというわけであります。ソリは板を二枚たてたようなソリであります。釘は使つておりませぬ。みなソリの上に床を敷きまして、紐で全部とめております。これはひずみに対して紐がよいというわけでありませぬ。ソリの上には、食料、炊事用具、犬を扱う用具等一切合財、積んでおります。

すと、なかなかスムーズにいかず、またのつかりますと、ソリの重みでソリごと沈むということがありました。まあ、犬にはドッグフード、私はエスキモーから得ましたアザラシとかトナカイの生肉を食べておりました。一日一食主義であります。

(五) 氷が動くなかで、平らな氷をみつめてテントを張るわけですが、ところが寝ていて、ものすごく静かなことはありませんで、大工さんがカンナを持つような、ハンマーをたたくような音がどんどん耳に入つてきまして、決して静かなものではありません。テントのまわりに犬をつないでおります。

(六) ある所では必ず一日一回は氷の面に亀裂が生じて、海水面を逃げて渡らねばならない所がありました。また、ある所では、このようにして非常に平らな所もありました。こういった所の氷は一年水でなくて多年氷といつております。一年氷といふと一メートル前後の氷です。氷の上に雪がついたりしておりました、私としてはソリを走らせやすい状態であります。海水面の通過には、あるところでは五メートルから十メートル、あるいは五十メートル、五百メートルくらいの海水面の大きな水路に出会うということもありました。そういった所ではなかなか渡れませぬで、氷の張るのを待たねばならないということもありました。

(七) これは大きな海水面に出会つて、氷が張るのを待たなければならぬ状態で、気温はマイナ

ス二十度から三十度の間ですと、非常に氷の張るペースが遅く、私の犬ゾリを走らせるだけの厚さは張ってくれなくて、数日待たねばなりませんでした。鉄棒で常に氷をチェックしておりました。また海水面が凍るときに、マイナス二十度あまりで表面が凍るときですが、私のがのっかりましても、圧力をかけましても、ヒビがピンとはいる状態ではなくて、雨がじわーとたれるような感じで下がってゆくという割れ方でありました。これはどういった現象かわかりませんが、塩分を含んでいるからかもしれません。

(八) 私の位置は六分儀でもって天測をして出しておりました。これは、太陽の地平線からの角度で出しておりました。出発点から一歩出ますと、あとの景色は全く変わりません。北極点も出発点も何も変わらない氷の状態であります。そういったなかで、ただ太陽の高度だけをたよりに位置を出しておりました。極地の太陽は、みなさんもご承知と思いますけれども、極点に近づけば近づくほど、太陽の上弦はありません。三月の半ばに太陽が出まして、それが全然沈まないで天を回っている、夏至の時に太陽が一番高い所に回るとして九月の半ばに太陽が水平線に沈んでいくというのであります。私の行動しましたのは、太陽のある時期に、白夜の時にやっております。

(九) 私は白クマには二度出会っております。一番目は出発して三日目に会っております。二回

目は後半に入って、グリーンランドの内陸に百キロぐらい入った標高千七百メートルくらいの所で出会っております。この時にはこの白クマは私を襲いました。寝ている所に夜襲を受けております。テントの外につないでおりました犬がハーケンを引き抜いて、この白クマがくると同時に犬だけ逃げてしまいました。どうしようもない犬でありましたのです(笑)。逃げ遅れました私は、結局ライフルを持つていたわけですが、そのライフルも実ははずかしいことですが、弾丸をつめるのを怠っております。こういったことで、九死に一生を得たことがあります。これはまた後で話さしてもらおうと思っております。

(十) 二回目にして、襲われたテントです。このテントの中に寝ている時にやられております。この時には襲われて辛うじて助ったわけでありまして、翌日またその白クマが味をしめてやっております。この時はやつぱり寝られませんが、犬の鳴き声と同時に私は飛び出しまして、ライフルで撃ちとったわけであります。

(十一) 犬といえますと、どんなに寒くても、テントの中に入れるとか、あるいは暖かい所に何とかカバーをしてやるというようなことはやっております。労働犬でありまして、こちらのペットとは違います。もしそういった気持ちで犬に接しますと、だんだん犬がだめになってしまいます。このようにして雪をかぶっておりますが、こうい

うふうな状態ですと、犬はかえって暖かく寝ております。かえって雪をかぶらないで気温が低く、幾分か微風が吹いている時には、やつぱり犬は悲しそうに子供が泣くような声をあげておりました。犬の毛は決して長くありません。アイヌ犬にちよつと似ておりますけれど、アイヌ犬より毛は短いのです。しかし毛の中には、羊のような毛が密集しております。そしてさらに長い毛が表面を覆っているという感じでありました。寒い時や寝る時は必ず団子虫のような感じで自分の腹の中に頭を突っこんで、最後に尾でもって顔をふさぐといった感じであります。

(十二) 私の食料は、エスキモーから得たアザラシだとかトナカイの肉を食べておりました。こういうものはすべてエスキモーから得いたのであります。一日一食で、一日の行動が終わりましたときに、肉を鋸で挽いたり斧で割ったり、丸太をテントの中に持ち込んで、天井からぶらさげて表面が柔らかくなったところで、ナイフを入れてましたり、また斧でくだきまして、鯨の皮下脂肪を調味料にして食べておりました。実は日本食は全くよくない食料であります。極地の行動では全然寒さには耐えられません。結局、そういったわけで、前にエスキモー部落に入った関係もありましたことから、エスキモーが昔から使っている現地の食料で、アザラシとかトナカイの生肉を食べておりました。一日一食ということは、一日で

この生肉を六百グラムから一キロぐらい食べます。夜食べますと朝は食べようという気になりませんです。紅茶を一杯か二杯飲むくらいであります。そして食べても、ビスケットを一、二枚食べる程度です。昼間は寒くてなかなか食べようという気にはなりませんでした。

(十三) 極点にかなり近い位置でしたけど、こういった平らな所ではソリがスムーズに走りました。北極海の中では一番早く進んだ時が五十五キロから六十キロばかりです。出発したあたり、氷の密集したところでは、一日一キロ前後が精いっぱいでありました。かえって歩いたほうが速いといった状態です。ソリ犬がおりますので、なかなか氷の中をこせなくて、さきのキャンプ地はたぶんこのあたりだろうと、またふり返つてみれば自分のキャンプ地がすぐそこにあるという状態でありました。極点に近づくほどだいたいこういった平らな氷が多く見られるようになっております。これは氷の表面が乱氷でも、ブリザードになりますと、雪が飛ばされて、氷のデコボコした面を全部平にしてくれるという状態であります。

(十四) 私はソリの上から鞭をふってやっております。これは北極点であります。旗をたてましたのは、カナダ・デンマーク・アメリカというそれぞれの国が協力をしてくれたからたてたわけでありました。極点も出発点も変わりありませんでした。ただ天測しているなかに、太陽の位置を一日

三時間おきにずっと測つてまいりました。一応座標を作りまして、プラス・マイナス・ゼロの北緯九〇度、東経・西経ゼロに近い点を一応北極点とみたわけでありました。いま右端の方に、ソリの上の筒が立っております。あれは実はアンテナであります。ソリの上に自動発信機をもっております。

これはN A S Aからスミノニアンの協力を得て持っております自動発信機であります。これには自動的に気温・気圧とか位置をキャッチして自動的に北極点の上空をまわっております。ニンバスシックスと申します人口衛星であります。これに電波を発信しまして、それをN A S Aのほうで受けてもらっております。私のほうは全然解らないのですが、N A S Aの方では今どこにいる、どういった気温か、気圧か、ということとは解っております。一分間に一度、自動的にキャッチして発信しております。それによりまして、私の測った北極点が極点から八百メートル手前まで達しております。この北極点には目標物が何もありません。北極点では氷の動きは、大体一日に二キロから三キロぐらい動いております。ここが北極点かと思えますと、もうすでにそこは、次の日には北極点からはもう離れてしまっているようなものであります。北極海の氷の中では一番早いところでは、グリーンランドの北西海岸では、一日二十キロぐらいの速さで氷が動いております。出発点では大体二キロでありました。北極点では

二・三キロという状態であります。ですからそういったなかで、犬ゾリを走らせて行つたときに停滞しますと、行動ができないと、どんどん移動してしまふという状態であります。

(十五) この北極点が終わりました後、飛行機でもって北極点にきてもらいまして、実はグリーンランドの一番北のモーリスジェサップ岬という所に運んでもらいました。これはあの極点から一番近い世界最北の岬であります。ここに入りまして、ここからフィヨルドをずっと入って内陸の氷上にております。

(十六) これも一番最北端の地であります。雪は非常に少ないです。気温が低いために乾燥しております。たとえ雪が降りましても、全部吹き飛ばされてしまうという状態であります。こういった所にも動物はいません。私はこのすぐ近くでもってジャコウ牛、日本の黒い和牛の毛を長くした感じの牛です。二頭みっております。またオオカミもみました。こういった所にも蘚苔類、わずかの高山性植物、極地性の植物もみられました。

(十七) これは、フィヨルドをずっと中へ入っていきました所です。フィヨルドといいますが、非常に大きな入り江であります。氷河が内陸からずっと押し出しております。今、こちらの左の方からシワ状になってずっとおりてきておりますけれど、中間よりもわずかに左によって、ジワジワ、ギザギザになっておりますが、あそこが氷河の末

端であります。そこから右側が点々と大きな氷が浮かんでます。これがあのフィヨルドの海水になるわけです。海水の上に浮かんだ氷になります。

山に登って自分の通れる位置を捜すわけですから、なかなかこういった中に入ってしまうと、どこにルートをとっていいのか、さっぱり解りません。この氷河はアカデミー氷河といいますが、幅が五、六キロくらい、長さが五十キロから六十キロくらいあります。今たくさんシワがみえますけれど、これはクレバス、こういった中に入ると、どちらにルートをとってよいか、わかりませんでした。

(十八) これは中に入ったものであります。至る所に氷の割れめがあいておりまして、そこを避けまして犬を走らせておりました。

(十九) これは犬を走らせているのですけれども、グリーンランドに入りますと気温はぐんと上昇しました。グリーンランドの標高二千から三千メートルあたりで最低気温はマイナス二十六度でありました。最高プラス七度まで上昇しております。上昇しますと、氷の表面、雪の表面と申しますか、ザラメ化してまいります、犬の足が傷ついてまいります。ピロード状の足をしておりますが、どんどんすり減って、穴があいてくる。それから爪がはがれてくるというようなことで、犬は血を流しながら走りまわりました。そういった中で、特にひどい犬に関しては、その都度足袋をはかせ、包帯

を巻いて治療しておりました。グリーンランドの内陸に入りますと、非常に平らな氷に変わってきいております。

(二十) 犬には我々のように足首があるわけがなく、なかなか思うように包帯できません。強く紐を締めますと、アキレス腱をひっぱりまして、傷ついてしまう。ゆるめるとスポツとぬけてしまうというようなことで、うまくいきませんでした。

(二十一) グリーンランドの内陸で最高所三千二百メートルの所を走っております。フィヨルドの氷河を標高千七百から千八百メートルのあたりまでずつといきますと、後はもうこういった感じでほとんど平らな状態になります。プラトー(高原)にです。こういったわけで北極海と違っています。デコボコはありません、ソリの上に実は帆をたてました。ヨットの関係者の協力を得まして、ソリにこういった帆を、特別に作ったわけでありません。これが非常に快調に走り、一日最高八十里以上、走ったこともあります。少し風を受けますと、犬の仕事分くらいの力が出ますし、またある時はソリの方が先に走ってしまつて、犬が引つ張られるという現象も起こったこともありまして。

(二十二) グリーンランドに入りますと、ソリもよく迂るようになりました。気温がマイナス三〇度よりも低くなりますと、もうソリは砂の上を走っているのと同じくらいです。ソリは全然滑って

くれないわけです。ところが、マイナス二十度をわり、〇度にもなりますと、ソリはスムーズに、スキーのように迂つてくれるようになりました。こういったわけで、犬も負担が軽くなりました。私も行動が終わりますと、できるだけ犬に接してやり、のんびりとくつろいでおりました。

(二十三) グリーンランドの中に入りましてから、景色なんて、まったく変わらないうえです。実は一日の変化があるのは、天候の変化、幾分かの水の変化があるくらいです。そういった中にある時は、ハロー現象といいますが、太陽が三つ見られることもあり、私の方においては、心を安らげる材料になっております。それから旅の中で特に面白いものが見られたということは、グリーンランドの北部ですが、航空地図をもとにしてずつと行動してきたわけですが、NASAからベースキャンプをおして無線でもって送られてくるデータと私が天測した位置とは、どうしても位置が違つておりました。後でみてみましたところが、グリーンランド北部のクルドラスム岬の近辺では、二十キロ近くの地図の違いがあることが解りました。

(二十四) これはグリーンランド南端のナルササークのすぐ近くであります。ここでこの旅をすべて終了させております。実は飛行場まで下りたかったわけですが、八月二十二日、八月といいますが、もう全然下の方では雪がありませんでした。

この地域では北緯六十一度にはなっていない地域であります。北極圏をさらに南下した地点であります。そういったことで一応この最南端で旅をすべて終えております。以上です。

植村先生の講演

私のスライドで、どういったことを行いましたかということ、だいたいお解り頂けたかと思えます。ここで私がネクタイを締めて、みなさんの前に立てた状態でなかったことがお解り頂けたかと思えます。この旅は一人でいろいろありました。わけですけど、出来事も白クマに襲われましたり、またマイナス五十一度という最低気温を経験しましたり、流水に巻き込まれましたり、途中マイナス四十度の中で小犬が生まれまじたり、クレバスに犬を落とすというようなこともありまじたり。いろいろと出来事もありまじたりが、思い返せば非常に厳しいことの連続のような感じでした。

犬との生活

しかし幾分かはこちらと違つた心の燃える雰囲気がありました。と申しますのは、犬という仲間がいました。犬は接すれば接するほど、なつてくれます。またこちらみたいに何かこういつたことをいっちゃいけないとか、何かこういつた恰好をしていたらいけないという、人を意識したなかでのものというのが、一人の行動のなかにはあり

ませんです。そういう意味からしまして、行動している時に犬に思つたことをどんだん声をかけてやるとか、またある時には、さきほどのフィルムの中には出てまいりませんでしたが、気温が零度前後に上昇しますと、行動が終わつたとき、素っ裸になつて気違ひのように奇声を上げています。なこともしました。でも、犬は何も言いません。犬は何かやつているのかという感じで一応見ますけれども、これも思うがままの行動ができたということ、そういう意味で、今皆さんの前で、こういうことは申し上げてはいけないなと、言葉を意識して話をしてるのは違ひ、心はもつともつと楽しいものがありました。こういつたことで、みなさんからすれば、一人でやつているから孤独だとか、別な面があつたのじゃないかとお思ひになられるかもしれませんが、やつている当事者からすれば、逆の面白い現象が現れております。実際、私も一人で行動している中で、孤独というものを感じたかという、私は感じなかつたんじゃないかと思ひます。かえつて都会のこのほうが孤独を感じるようなものもあります。

白クマに襲われる—そのときの万感

この旅の中で私が本当に死ぬのじゃないか、というせつぱつまつた心境に迫り込まれたこと、これまで二度ございしました。先程ありました白クマに襲われた時、もう一つは流水に巻き込まれま

した時の二つであります。

白クマに襲われた時には、私は白クマよけのために新品のライフルをエスキモーから買って持つていたんですが、まさか出発してからすぐ襲われるとは思つてもいけません。一人の行動です。ので、やつぱりいろいろやる仕事はあります。仕事の分担ということができません。そういうことで、旅が始まつてから少しづつやればいいという安易な気持ちで始まつております。ところがいきなり白クマの不意打ちを食ひまして、いざ使おうとしたところ、弾丸をつめるのを怠つておりました。これは出発して三日めであります。氷の上にテントを張つて、犬はテントの外にハーケンを打ち込んで一括して繋いでおりました朝方です。山で使つております寝袋を二重にして寝ておりました。寒いから頭からすっぽりかぶつておりました。顔なんか出しておりますと、マイナス三十度から四十度ですと、たちまち凍傷になつてしまひます。凍傷にならないまでも、針をさされるように痛くて顔なんか出して寝られまじせん。すべて身体をシュラフの中に巻き込む状態で寝ているわけです。ところが朝方、犬がすこく吠える、それで目がさめました。夢うつつ、なんで吠えているのかなという感じでした。ちようどめす犬が発情しておりました、他のおす犬がめす犬をとろうとして喧嘩しているのじゃないか、とふと思ひました。ところが犬が急に鳴きやみまして、鳴きや

んだと同時に、別の物音が聞えました。これが白クマの足音だったのです。氷からすぐ耳に伝わってくるというようなものでありました。

その時、私は、さあしまったと思って、ライフルを取り出そうとしたところが、弾丸をつめるのを怠っていた。すぐ今度は弾丸を捜そうとしたのですけれども、どうしても思い出せないので。寝ているすぐ横にライフルを持ちながら、弾丸がみつからない。あまりにも興奮しておりました、思考力を失っているという状態でありました。今度は逃げようということを考えました。ところが逃げようとしなくても、トナカイの防寒具、白熊の半ズボン、アザラシの長靴というものを、寝る時には二メートルのピラミッド型のテントの天井から毛皮をぶらさげて寝ております。すぐに二重の寝袋のチャックをあけて、それから防寒具を着てテントのひきがわの入口の紐をゆるめて逃げだすなんていう悠長なことはやっておれませんでした。あまりにも白クマの足音は近づきすぎておりました。そういったことで、結局テントの中でじっとしていて、見つからないようにするほかありませんでした。ところが、私にも隠れていれば助かるんじゃないかという望みを持っておりました。それはテントの外のソリの上にアザラシの肉をおいておりました。カチカチに凍りついたアザラシの肉です。それからドッグフードをたくさん持っております。始まったばかりだったので、いっ

ぱい持っていたのです。これを白クマはアザラシを常食としておりますから、ひよつとしたらアザラシの肉を食べてくれるんじゃないかという、そういう容易な気持ちでした。それでシュラフの中でじっとしておりました。ところが全然その足音はソリの方に行かないで、ストレートに私の枕元へやってきました。犬の音が聞えなくなりましたのは、白クマが来ると同時に、私という主人をおいて犬だけ逃げてしまったからでありまして、もうどうすることもできない。テントのわきで止まって、次に聞えたのはナイロンのテント地にじかにくつつけて嗅ぐ鼻息であります。それを爪でかいて、かぐ音であり、ナイロンにナイフで傷を入れてシーと引き裂くような音であります。何回か聞いております。そればかりじゃなくて、前足か後足か解りませんが、私の寝ている横のあたりに強い圧迫感を感じております。その時なんかの私の気持ちは、もう食べられてしまうといったせっぱつまった気持ちでありました。でも、食べられてしまうとは思っていても、死んでもいいということは一度も思っていないんです。もう助かりたいという一途でありました。

そういつた時には恥かしいのですけれども、無意識のうちに、「おかあちゃん」と叫んだり、家内の顔を思い浮かべて助けてくれという感じで、もう必死に助けを呼び求めているという状態でありました。でも、そういったものは、はつきりいっ

て何の足しにもなりませんでした。その時に私が感じたのは、神にすがることでありました。どうか神さん助けてください、と無心に祈る。それが幾分か心を安らげてくれる、じつと心を落ちつかせてくれるというようなものでありました。これは神さんというのは、仏さんであろうと、釈迦であろうと、キリストであろうと、何んでもいいのです。自分を助けてくれるのが、自分のすべての神であるというようなものであります。こういったなかで、白クマは必死になって捜すわけでありました。白クマは好奇心でやってきたわけでありません。白クマは好奇心でやっけてきてやっけてきているわけでありました。そういつた中で、白クマは最後に私を前足か後足かそれとも頭かも解りませんが、移動させました。背中が上になって止まっておりました。この時には自分でもうだめだと思っていたのですが、そういつたところが、白クマは私を捜すのをあきらめて、ソリの上にあるアザラシの肉をガリガリと食べ始めたというところでありました。カチカチに凍りついた生肉でありまして、せんべいをかじるようなパリパリという音、それからクジラの皮下脂肪をポリバケツに入れておまして、バケツを引き裂いてペチャクチャと食べる音を聞いております。約二時間くらい留まって、満腹になりましたんでしよう、立ち去った状態であります。それで音がしなくなりましたもんですから、テントから出てみたところが、

犬は遠くの方へ行って、遠吠えをしている。私はその犬を見た時には、本当に憎たらしいというのですか、こんな犬なんかいらぬというような感じ、かなり汚い心でいました。でも自分で引き返すには犬がいなくちゃならない。また白クマがやってきたらと思いましたが、足は震えていて、逆に犬に早く来い、早く来いというように呼び求めているという感じでありました。すぐに犬を呼び求めまして、テントを張り替えて、無線でもってベースキャンプの連絡員と交信しておりました。

助かった理由

私が出かけた理由は四重のテントだからでありました。これは空気の層を多く作って、外気とテントの中を空気の層で遮断しようとしています。これが非常にいい結果をもたらしまして、外側の二重しか爪が通つてなかつたというようなことであります。これが何といたっても一番大きな助かった原因ではないかと思えます。最後に転がされました時にも、トナカイの敷き皮を背中に敷いておりまして、それが大きなものでして、私の身体を覆ってくれて巻き寿司のような形でなおさらみつからなかつたんじゃないかというようなこともありました。

白クマを討ちとる

実を申し上げますと、この白クマに襲われた後とい

うのは、無線でもって連絡して補給を待っていたのでありますが、寒くもあつたんですが、もうこわくて夜も眠れませんでした。石油コンロをたいて張り替えたテントの中でじっと待っていました。翌日の朝方です、また白クマがやってきまして、犬が吠えると同時にテントから飛び出して、近づいてきた白クマを撃ち取ったわけでありました。撃ち取ってみましたところが三百キロから三百五十キロもある大きな白クマでありました。動物を殺すということに対しては、かわいそうだという気持ちはこれっぽっちもありませんでした。この畜生がやりやがったという感じで、うつ憤を晴らしたような気持ちであります。足でけとばしたり、また腹を割ってその肉を食べたりしております。とてもおいしかったです(笑い)。

こういったことでありまして、この時には自分はまだもう旅を続けていくと、そういつも幸運を勝ち得ない。この白クマに襲われても死なずにすんだのは、どうみても幸運でしかありえないと思えます。と、始まったばかりですから、これから先何回か目には必ず裏目にでるんじゃないかという気持ちになりました。

無意識の前進欲の中の、今回のもう引き返

せないという自分への至上命令

そうした時に、私自身こういう行動をしていますが、死んでもいいからやろうなんて気持ち

は毛頭ありません。そういうたなかに何となしに、無意識のうちに、自分で先へ進まなくちゃいけない、進まなくちゃいけないという、もう一つの私がありました。これは引き返す私には、何の条件もないものがあります。この計画を打ち出したことに対して、いろいろな人に協力してもらっています。特に金銭的にいろいろありました。ところが、はつきり申しまして、この旅ができるかどうかかわからない、可能性が少ないですというような事で、協力をあおぎましたところ、できるかどうかかわからないものに協力はできないと、断われました。可能性のないのはだめとしますと、断られた理由が何であるか解るようになりました。それは可能性のないことを言ったがゆえに、だめだということが解りました。そうしますと、そのうちにそういったことを一切吐かなくなつてまいります。それに代わって、いやこの旅はもう出来ませよ、と言わんばかりに、私はグリーンランドでもって一年間エスキモーと生活してまいりました。それから北極海沿岸をグリーンランド、カナダ、アラスカと一万二千キロ走つてきました。だから北極のことは何でも知っています。山だつて五つの大陸を全部登ってきました。もうこの北極圏でも出来ませよ、相手の方が極地のことを知らないということもありまして、あの手この手で攻めていく。その時に、ああそうかな、という感じで協力してもらおう。協力してもらった時

に、有り難うございますという気持ちで受け入れられたかと申しますと、そうではありませんでした。私はだましてしまったな、という詐欺的な行為というのを心に感じました。ところがですね、たとえばみなさん方に極地のことをいくら嘘を言っても、意外と通用するのです。みなさん方は極地に入っておられませんか、これだけのことを言ってお調してもらえなければ、これだけのことを言えはいい。まあ、こういう感じでありませう。そういうことで、私もこの計画をするにあたりまして莫大なお金がかかりました。そういったなかに、可能性のないような言葉はやっぱり出せませんでした。こういつたことが、かなりの人に咎められるような偽りを申してきております。ところが、いざ旅が始まりましたら、どんな偽りも通用しません。すべて自分でできなければだめです。あります。そういったときに、例えば白クマに襲われたから、もう出来ませんですと帰って帰って、くれば、なんだ、あいつ、ほらばっかり吹いて、何も出来ないじゃないかと言われるのが関の山だと思えます。私はここで、白クマに襲われたからできませんです、と帰って帰ってくれば、次に何かやろうとするとき、ああ、この人は前にやれなかった人だから、次だつて出来ないんじゃないかという疑いの目を必ず持たれると本当に思います。これは私ばかりじゃないと思います。みなさん方、待つていらつしやいましてね、もしこの時間

に私がここに来ませんでしたら、次に何かあった時に、ああ、あの人はだます人、時間を間違える人という、はっきりと先入観念というのが持たれると思えます。そういう意味からしますと、私なんか金銭的なそういう協力を得て、技術的にも協力を得てますと、なおさらやらなくちゃいけないという厳しい義務というものがあつた。こういった中に死ぬということがなければ、どんなことがあるうとも、厳しくとも、苦しくとも、たとえ一日でも一時間でも行動する義務があつたんじゃないかと思えます。我々は行動する前でありませうけれど、私はこれをやります、あれをやりますというような感じで、いくらでも我々は言えると思えます。しかし、果たして人に対してその言葉でもつてどれだけ実行できたかという、つまり人に対してその言葉に対して責任が持てたかといふますと、やっぱり私なんか恥かしいんですけれど、一方へ目を隠さなくちゃならないことがあります。いろんな人に迷惑をかけておりますけれど、今回の旅については、それなりに引き返せない状況のものがありました。

体験の陣痛あつて技術の誕生あり

また、厳しさという面ですけれど、マイナス五度という厳しさは、また排泄にしても同じであります。みなさん方の前で、排泄の話するのは恥かしいのですけれども、たとえばマイナス四十

度の中で、こちらと同じようにのんびりお尻を出して大便をしていられるかという、これもなかなかできないものであります。ズボンをずらしてお尻を出すとしますと、三分くらいでお尻全体が針でさされるような痛みを覚えて来ます。どうしても我慢できないことになります。でもどうしても出かかったものは、途中で止めるわけにはいかなくなります(笑い)。結局最後までやつとの思いで、ズボンを上げます。そういったことを何回か繰り返しますと、痔になつてしまいます。ソリにのつかつてますと、じかに頭に響いてきます。もう行動に差しかえませう。一日一キロ以上の生肉を食べますと、一回では排泄は終わりませんです。二回くらいになります。寒いからといって、 TENT を張つて石油コンロをたいてお尻をだすなんて、そんな悠長なことはいつておられませんです。ところがそういう厳しさを経験しますと、今まで五分かからなくちゃ出来ませんといつていたものが、四分でできるようになり、二分で、しまいには三十秒以内、十秒以内といつていくくらい、ズボンをずらした時には半分くらい終えている(笑い)という具合にですね、早打ちの名手(笑い)というのですか、これも極地の技術でありました。

みなさん方お笑いでありませうけれどね、実際に痛みを耐えかねてきた行為、それが私は技術じゃないかと思えます。みなさん方本当に勉強勉強ということ、いろいろ文献で、また人から聞いて

たことで知識を深めていつてらっしゃいますけど、もう一つフィールド・ワークの技術も行動も絶対欠かせないものじゃないかと感じます。それはですね、その人において技術なんてのは、やっぱり自分が実際にやってみてきたものがほんとうの技術であって、人から聞いたこと、文献で読んだことというのは、とっさの判断という時には、何か、疑うものがでてまいります。例えば、経験した範囲のものでありますと、即座に、瞬間的に良いか悪いかというのは、下せます。ところが自分で経験してないことで、人から聞いたこと、また文献で読んだことで、たとえ良いというのが解つてましても、それは決断を下すためにどうしても時間がかかる。もう一つは、下してからも果たして出来るかどうかという不安が、そこにつきまっています。その不安は先に進もうとするものでなくて、一歩引き下がらうという、ものすごく危険な行為じゃないかと思えます。そういう意味からしまして、実際私は思うのですけれども、経験が技術じゃないかという感じがいたします。これはすべての面を通じるかどうか解りませんが、自分の行動のなかで、犬ゾリを扱うのに関しまして、いろいろとエスキモーは教えてくれます。ところがいざ自分でやってみるかというと、これはやっぱりできませんでした。一年かかってでもできませんでした。まだ一万二千キロやっている時に、だんだんとやってくれば自分で本当に死ぬ思

いをしてくると始めてそういつた中に少しずつものが解ってくるという感じであります。私と、極地のむこうで昔から生活をしている人の技術との差は、表面では解らないけれど、あつたはずです。こういう意味からしまして、自分の行動の中にも考えさせられるものがありました。

成功は協力から

極地のことで、もう一つ申したいことがあります。この旅の成功した一番大きな原因は何だったかといえますと、私はこれはやっぱり人の協力があつたからじゃないかと思えます。先にも申しましたように、人にいろんな協力してもらつていて、もう自分が引き返せる状況じゃないものをもつてしまつていると、もうがんじがらめの状態に追いこまれてしまつていて、まあ、そういった中から行動が出来たということじゃないかと思えます。もしこれが自分のお金でもつて、あるいは自分の技術でもつてやっていたら、もう白クマに襲われた時点で「もう止めた」といつて、エスキモー部落にはいつて、どこかで遊んでいたかもしれないです。また何か別の行動をしたたかもしれないです。やっぱりそういうつた中で、もう自分が引き返せる状況じゃないものを作っていたが故に、何かできたんじゃないかと思えます。

完遂時の感懐―人に迷惑をかけなかった。

公言に齟齬(そこ)なかった―
 出発してからいろいろ考えさせられる中において、到着した時に何を感じましたかといえますと、人に迷惑をかけなくて良かったといふことを一番強く思つております。それと同時にもう一つは、自分の口に出したことは間違いがなかつたんだ、自分で自分を良くやつたと、まあほめてやつていく。この二つでありました。人に迷惑をかけなくて良かったつていうのは、やっぱりいろいろな人が協力してくれましたんですけども、協力をしてくれる中にも、例えば会社の中でも、会社がじゃかにお金で協力してくれるというわけではありませんです。例えば会社の中にも、自分をかけて、会社にこれだけの意義がありますよ、というように働きかけてくれた人がいるわけです。もし私が失敗すれば、そういう人は追い出されてしまふか、あるいは左遷されてしまふか、少なからず迷惑をかける、まあそういうことがありました。そういったことからしますと、本当に迷惑をかけなくてよかつたということでありました。やる当事者からしますと、実際にやるということを決めたんだからやるので、これは人から危険な場合は引き返してきて下さいとか、危ない時には帰らなさいとか、そういうような同情的なもの、はつきりいつて一つもプラスになつておりません。逆に、お前なんか失敗すれば、帰つて来なくていいというような言われ方をしたほうが、かえつてやる者か

らしますと逆境の精神といえますか、意地でもこうやってやろうというような気持ちに私の場合は置き換えてきたような感じでもありません。

出郷、大学に入る

ふりかえってみれば、私の経歴を見ても、ほんとうに勉強も出来ませんでした。そして大学へもとても行かれないような状況であったんですけれども、これも実は前にもちよつと申しましたように、志願者が少なかつたお陰で入れたようなものでありますし、今から思えば学校に対してものすごく感謝しております。

都会での学生生活

そしてまた大学の学生生活においても、これまで、自分で勉強しようという気持ちもありませんでしたが、たまたま私の出身地が兵庫県の日本海側の片田舎でありまして、今でも山猿だとか、いのししの出るような所でありまして、そういった所から東京の方に出てきたものにとりましては、やっぱり都会の冷たさといえますか、下宿しておりまして、毎日顔を合わしても挨拶もしない。——こちらではみなさんはそういうことはありませんで、非常に恵まれた所にいらつしやいますけれども——私の場合は、そういった挨拶をしない人にこちらが挨拶しましたら、変な目で見られて、何か挨拶したほうが悪いことをしたような感じで

した。田舎ですとそんなことはありませんです。もう横のつながり合いというのは非常に深いです。まあ、そういう都会の冷たさです。

郷愁で山へ

それからやつぱり、この造形のものばかりの都会、そういうものの中で、田舎の景色に浸りたいというようなものがありましたし、こういつたところで、山を一度も登ったことはなかつたんですけれども、まあ山岳部に入れば、いい友達もできるんじゃないかと、また田舎のような景色に浸れるんじゃないかという、まあそういう感じで山岳部に入っております。

大学の山岳部で

山岳部に入ってから、さらに続けていく中に——私はちよつと入ったのが遅かつたんで、まだ山を全く何も知らないうちに、ああいう気持ちで入っていったんですが——まあ私の予期しないスパルタ的なものがありまして、いきなり四十キログラムという非常に重い重量を背負わされて、上級生は小指で上がるくらい荷物しか背負わないという、何かちよつと軍隊的なものがあつたんですけれども、そういう中に私もすぐばててしまつて倒れる。そうすると、もう足で蹴飛ばされるとか、ピッケルでぶんぶんぐられるというようなことがありました。でも途中でぬけ出すということは許さ

れませんで、結局歩いていけるうちに、しまいには本当に歩けなくなって倒れますと、今度は上級生が倒れている私の前のボタンをはずして、さわろうとする。誰だつて恥ずかしいから、足を引っこめて、こうやる。そうすると、羞恥心のあるうちはまだ歩けるんだというようにことで、一層パッパッパッと暴力的なことをやられる。そういった時に、自分でここに居れば殺されてしまう、という気持ちさえ持ったりもしました。それと同時にもう一つは、上級生に対して、こんちきしょうという復讐心のようなものがありました。

またキャンプをしておりますと、木陰で排泄なんかしてますと、上級生が来てのぞき、それでもって、これなら今日はまだ歩けるといふ感じで見られる。そういうような状況でありましたが、合宿が終わりますと、意外とそういう厳しさがなくて、上級生と下級生が、厳しい時にお互いに助け合う横のつながり、そういう何か人間的な良さというものを強く感じました。そういった中では、実はこの私のほうも何も隠すものがなくなつてきますと、本当によくなくていくというような感じでありました。

これがだんだんとやっているうちに、一年のうちには、とにかく従つていけばよかつた。二年生になると、今度は教えられた立場から教える立場に変わる。そうすると、自分の登山能力というものがありますんで、だんだんと劣等感を持つように

なる。下級生のほうが私よりも山をよく知っているということ、私自身隠れて山行きをやるということでありましたし、それで結局、山、山ということで、一年に百三十日から百四十日ぐらい山に入っております。

世界の高山・大川を踏破し、

遂に北極に挑む

それで結局山だけで、すべて終わってしまったというような感じでありまして、人それぞれ就職していくのに、私は就職を結局とりやめて、自分の好きなといえますか、せめて富士山よりも高い山、外国にある、日本にはない氷河の山をこの目で見れば、他の人たちが希望の場所に就職していくのと同じぐらい満足だという気持ちで、外国にとび出したのが、今から十六年前であります。

以降、無銭旅行でもって、ヨーロッパをはじめとして、転々と渡り歩いて、それがだんだんとエスカレートしまして、まあ世界の五つの大陸の最高峰を世界で初めて登らせてもらいました。それからまたアマゾン川をペルー、アンデスの裏側から本流を大西洋岸まで六千キロ筏で一人で下ったりもしております。まあこういうものだけでは自分で満足しきれないものがだんだん出てまいりまして、それが極地の夢ということになりました。実は南極を横断しようというような感じの中に、なんといいいますか、グリーンランドの一年間

の生活、グリーンランドの三千キロの犬ぞり旅、そして一万二千キロ、この北極点というようなことで進んできたものであります。

時間がちよつとオーバーしてしまいましたんですが、これぐらいにさせていただきまして、あと皆さん方との討論会の中からお話を続けさせていただきます。どうもすみませんでした。

(拍手)

討論

●司会 どうもありがとうございます。ではメンバーからいろいろと質問などを出していただきたいと思えます、どうぞ。

●昇 寛 (東農大三年・北寮) オゾンドックスな質問なんですけれど先生は世界各国の五大陸の山、それから大きな河、それから今回の極地と、こういうふうな経験をなされてますけれども、いずれも一人で単独で行かれる場合が多いですね。先ほど自然の中にいるほうが孤独感を味わわない、むしろ都会にいるほうが孤独感を味わわれるとかいうふうなことをおっしゃってましたが、その辺もあわせて、先生が孤独で、単独で一人でいるんなところへ行かれるというのは、先生にとってどういう意味であるのかということ、いかがでしょうか。

●植村 うーん、自分でも解らないですけどね、行動中にはどうして孤独でないかということですが

けれども、行動中にはそれにすべてをかけてやっていたらいいという、まあそういうことですね。

ところがこちらで何かやっているときには、いろいろ準備をやったりなんかしている時ですが、思うようにうまくいきません。そうするとですね、やっぱり障害にぶち当たるわけです。そういった時というのは、人に話しても、たとえ家内にも話しても、これは解ってもらえないという孤独感ですね。一人でやっている時にはもう無我夢中で、そういうことでは、それほど感じないということです。

孤独ということとは別としまして、一人でやるということですが、これに何故と聞かれますと、非常にむつかしいです。私にもはっきりして解らないと申してもいいと思うんですけれども、ただ人とやるよりも一人でやっているほうがやり易いということは、はっきりといえます。人と一緒にやるというのは、お互いにちがってきます。例えば、山なんか一緒に登ろうといっている、自分で登っていて途中でもういやになっても、相手の人が登ろうと言ったら、もうここでもって自分の主張をすれば、隊は分裂してしまう。やっぱり相手のことを思うと一緒に行かなくちゃいけないというふうなこともあります。二人でチームを組むということは、自分の気持ちが受け入れられるのは半分しかないと思うんです。五十パーセントだと思えます。三人おれば三分の一、四人おれば

四分の一、ということですね。例えば、もう十人も二十人にもなつてしまえば、自分の主義主張なんていうのは、出していいものでもあつて、また決して出しちゃいけないものもあると思うんです。もし人の意見を押し切つて、自分で一方的にやるということになれば、他の人がいやでもそれに従わなくちゃいけないということがあると思いません。まして、そういった時に生命がかかつて来れば、人と一緒にやつていて、おれはこちらだ、おれはあちらだというようになった時に、自分のほうが正しいと思つた時に、もし相手に従つたら死ぬんじゃないかという気持ちがあつたら、果たして従えるかということをおもいますと、やつぱりそれならば、自分一人でやつたほうがいいという気持ちになります。行動半径は、人と一緒にやるよりは小さいかもしれません。しかし自分の気持ちは100%生かされます。それでもつて100%自分の純粋な行動の中でできます。人と行動するというのは、仕事を分担することによって、自分がその中でできなくてもいいものがあります。例えば犬を扱う人、また計測をする人、あるいは他のことをやる人、そういうふうな分担がありますと、自分ができなくても、ちゃんと一つの輪としてできるわけです。まあそういうことがあつて、行動は大きいかもしれませんが、やつぱり一人のほうは自分のやれる範囲の行動をしていけば、決して危険なものはない、私は一人のほうがチームでやる

よりは、もつと安全じゃないかと思う。それはもう自分の行動の中には偽りというものはありません。しかしこちらに帰ってきますとですね、いろいろ皆さんが同調してもらわないと、何か行くといわなくちゃ行けないんだと、そういうものをどうしても感じてしまう。これはもう別のものが出てくるというものでありまして、はつきりいつて一人のほうが行動しやすい、100%自分の気持ちが生かされるんじゃないかというのが自分の考えです。はい。

● 司会 それに関連しまして何か。どうですか。
● 荒巻 晋(早大法二年・西寮) 植村先生は大学の時から単独行をなされていたと聞いていますけど、大学の最初ではパーティを組んでなされたと思つて、あの部の活動の中では。僕も高校の時山岳部で、山へ登つていたものです。単なる山に登るといっただけじゃなくて、そういう一緒に山に登る連帯感といううれしさというのがすごくあつたんです。例えばエベレストなんかでは、植村先生もパーティを組んで登つておられますね。やつぱり一人で行つた時のほうが自分なりの満足感は大いといわれましたけれど、みんなで何かをやるということに関しては、どうでしょうか。

● 植村 まあ、これは私がどうこう申せないんですけれども、満足ということに関しますと、やつぱり北極点をやつたからどうか、あるいはエベレ

ストをやつたからどうかと、そういうものに対する満足感よりも、もつと本当に満足を感じているのはですね、アフリカのほうのケニア山とか、アマゾン川の筏で下つた、そういう時のほうが、もつともつとやつたなという心底からの満足を感じております。エベレストの場合は、たしかに日本人で最初に頂上に登らせてもらったかも知れません。まあそういうことの満足はあるかも知れませんが、しかし私なんかチームの中で歯車の一つとして、最後のランナーとしてバトンタッチして頂上に登らせてもらったわけでありまして、この陰にはすごい底辺があるわけですし、そういうことをおもいますと、私のやつたものというのは、まあ何といえますか、すべて満足のいけるものがなかつたような気がします。例えば北極点にしましても、いろいろ人を意識しながらやつているから、先ほども申しましたように、迷惑をかけなくてよかつたということが先に立つたこと、これも満足にはやつぱり通じないものであります。

ケニア山とかアマゾンになりますと、ケニア山の場合は無銭旅行をやっている途中でありまして、フランスでは、スキー場でアルバイトをやつておりまして、どうしても山に登りたいということ、入ったお金は絶対出さない主義で、がめつくかせいでおりました。こういつた時になりますと、恥も外聞もだんだんうすれてくるものでありまして、人と一緒に食事をしましても、その人が立ち去つ

たあとに、内心失礼しますというような感じで、ちよつと残っておりました物を食べるということもやりました。それからまた、コーヒーなんかでも、同僚と一緒に飲みに行こうといつても、自分では飲めないというような感じで水を飲んだりすると、まあ、おごるんだから飲めばいいんじゃないかというようなことをいわれても、まあ、おごられると必ずおごり返さなくちゃいけないというのが、暗黙の我々の社会だと思えます。まあそういうことだったら、はじめから全然飲まない。というのもこれもコーヒー一杯分がアフリカの一日分の生活費になると思つたら、どうしても飲めるものではないませんでした。

このようにして切りつめたお金でもってやつている時、自分でじめじめに感じるかといえ、そうじゃありません。人は愛人だといひましても、逆に誘ってくれますと、ああまたアフリカの生活費ができた、そういう気持ちになってきます。こういっただけのお金でもって、アフリカに行つて山登りをする。まあ、ジャングルを越えて、十分なポーターも雇えないで、簡単な登山かもしれせんんです。でも、その時には心底から「やつた」という、自分のお金でもって自分のやりたいことをぶつつけたという満足感ですね。そういうことからしまして、人は常に行動できたものから見つめまされ、しかしやつた本人はそうじゃない。どれだけやつたものに対して心かけたかというほう

うが、もっと満足の度合いを作っているという感じがします。そういう意味で満足というのは、私からしますと、皆さんが思つておられるのと別だと思ひます。

● 荒巻 植村先生は大学卒業以来、次から次へと山に登つて、新しいことを次から次へひっきりなしになさっているわけですけども、その次の冒険へとかり立てるものというのは、自分の中にある何かやつてやろうという、自分の満足を得たいという、自己の目標を満足させたいという、欲求ですか。

● 植村 自分でも解らないんですけども、一つの基盤になつているものとして、劣等感というのは、はっきりあります。自分でやればやるほど、満足できないものがあります。旅をやつたから、さぞ皆さんで満足を感じているんじゃないかという気持ちを持つておられるかも知れませんが、やっぱりやればやるほど首を絞められる、そういうものを私は感じております。駆り立てるものは何かといひますと、例えば一つのをやりますと、自分のやつてきたレベルというのがわかります。日本から一歩出て、自分のやつているものとの他ものとは比べる。そうした時に、自分を証明できるものは、言葉ではなくて行動しかないんだという、そういう気持ちになつてきます。こういうことがいえるのも、今、自分の肉体が思つていることと行動が一致して動くからじゃないかと思ひ

ますけれども、これが体力的に衰退をたどつたと自分で感じて来たら、やっぱりこれはその時のものに合つた行動に切り換えていかなくちゃいけない。

私としても一発やつたから少し休もうということも考えられるかもしれませんが。しかし次のものをやる一番いい条件は、やっぱり前やつてきた余韻が残つている状態の次に持つて行くのが一番いいと思ひます。ところが、二年三年たつてからそのまま持つて行かれるかということ、今度は危険な状況になると思ひます。ということは、次の行動をやるために、新しいものを求めるものは、私自身は何もありません。少なからず、過去の経験でこれ次のものにさらに慎重に当たれば、何か今までのものにプラスの行動ができるんじゃないかという、まあそういうものです。それ以上のものを求めたら、新しいものを求めると、今までも全く予期しないいろいろのことが起きてきておりますから、ものすごく危険です。ですから、要するに、今までやつてきたものを延長させればいいという気持ちで、次のものへ次のものへと進めてきているのであります。

● 司会 植村先生の迫力に圧倒されていますが、メンバーはほとんど質問して下さい。はいどうぞ。
● 卯野修三（法政大学四年・北寮）今の質問に聞連してですけども、劣等感ということなんですけれど、人間誰しも劣等感はあると思ひますし、

僕自身も劣等感を持っているんです。先程の先生の講演で、二人いたら競争に勝ったことがないとか、そういうことも含めて、こんなことを言うとか失礼なんですけれど、先生ちょっと劣等感を意識されすぎてるんじゃないかと思っただんですが。まあそういうことに関連しまして、劣等感を、生いたちも含めてですけれども、大学で登山部にはいられた、その間の過程における劣等感に関して何か……。

●植村 劣等感、劣等感と今さっきも私申ししておりましたですけれども、劣等感ということが私の口から出るようになったというのは、たしかに、もう劣等感じゃないかもしれません。自分のやってきたことを、論理を説明する材料でしかないかもしれません。はつきり申しまして、自分で授業に出なかったとか、あるいは勉強できなかったとか、何かさぼったとかいうようなことが言えるようになったのは、自分が行動を一つしてきて幾分か言える、また一つしてきて何か言える——そういうことであります。

私の学生時代の山岳部での立場といいますと、全然山を知りませんでした。新しく入って来る下級生のほうが高校の時から、また中学から、山が好きで山岳部にはいってなくても登っているという、そういう知識を持っておりました。そうした時に、自分が暴力的にやられてきた時に、じゃあ下級生が肉体的に今倒れているといった時に、自

分ができるかといえは、やっぱりそれは私にはできませんでした。というのは、これができるというの、自分が少なからずその下級生よりも山に對する能力を持っていないんじゃないかと思いません。もし能力、知識なくして、それをやれば、私は本当に暴力になってしまおうと思うんです。

ところが、その山岳部に人間的な魅力というものを感ずるようになっておりました。そういった山岳部に籍を置いて行動していく中に、やっぱり何かなしに自分で山の知識がないという劣等感です。で、山岳部の合宿が始まる前に、いろいろな山行きが決まりますと、私は隠れてその山を登って、あたかも知ったか振りをしなくちゃいけない。それでまた、下級生が休んでいる時に、大いにあの山は知っているかというような感じでやらなくちゃいけない。ところが下級生のほうが山をよく知っているものですから、さらに見えなくてもいい山まで見えてしまつて、結局こういわれる。そういった時に、やっぱり何となしに上級生としての貫録を挫かれたようになってしまつて。そうすると、下級生にない何かを自分で持つとうとか、相手にない何かを持つとうとかいう気持ちが出てくるようになったと、いうようなものでもありました。

●司会 はい、他に質問ありますでしょうか。メンバーの方。はいどうぞ、町村さん。

●町村 謙（東大法四年・南寮）今の単独ということとは少し話が変わるんですけれど、先程のお

話の中で先生が実際に犬ぞりで走ってなされる時に、白クマが出てきた話などいろいろな話なんですけど、その時に、何故自分が戻れなかったかという、今まで出発前にいろいろな人から協力を得ていたのに、そういう人たちに對してのことを考えると、自分は帰ることはできないんだということ、自らを帰れないような状況に追い込む。やっぱりそういうことというのが、何か一つやってやろうというときには、重要な部分とお考えでしょうか。

●植村 やるということを決めたと言うことにより、今度は自分でもそういう状況を作っていくということも、はつきり言っております。自分で決断を下すまでには、どうしても意志が弱いものがあります。したら公にさらけ出してしまつていうようなことです。それによって自分にことばに責任を持たなくちゃいけないから、それから人から物を借りてしまつていう、そういうことです。決してその意志的には自分では強いものを持っておりません。まわりをそういう態勢により囲んでいこうとしていたものだと思います。

●司会 はい、どうぞ。

●吉宮由真（上智大学経済学部二年・北寮）少し話がちがうんですけれど、例えばさっきの犬ぞりの旅行にしても、普通は犬ぞりとエスキモーの人たちが使っている道具を使って、あとは発信器というのはNASAの宇宙局ですか、あそこを使

って、非常に古いものと新しいものをいろいろ組み合わせて使っているわけですが、例えば新しい旅行とか、探検する場合には、最終的にはすべて自分でそういう組み合わせというか決定は植村先生自身でなされるわけですか。

●植村 実には訳がありまして、私はNASAの人工衛星を使うことは、予定の中には、当初の計画には全くありませんでした。ところが、この行動の中に北極点とグリーンランドがある。実は北極点の出発はカナダです。グリーンランドはデンマーク領です。ところがデンマークのほうにこの計画に協力を依頼しましたところが、相成らんということで許可を貰えませんでした。実は許可が出ましたのは、日本を出発する一か月前でした。非常にせっぱつまっていた。グリーンランドの中でこの行動をすることは非常に危険である。それでもってデンマーク政府に対して迷惑をかける、というようなことであります。そういうことで、自分としてはどうしてもやりたいということでありまして、これをやることによってこういう意義がある、それから安全性はここまでであるといい、いろいろ切りつめてきて、最終的に、NASAというよりもスミソニアン研究所が枠をもっている中の無線機を使うことによって、始めて許可を取れたような状況です。

まあそういったことで、犬ぞりと全然真反対の機械を使っているということが出てきております。

これは私自身探検とか冒険とかいう意志なんてのは全然ありません。自分で探検だと思っただけの行為というのはいつもありません。この北極点、グリーンランドをやるに当たって、私の気持ちとしては、まずこの北極点をやりたいんだということ。南極を横断したために北極点をやりたいんだということ。で、南極を横断する距離が約三千キロ。だからこの三千キロあるグリーンランドの南北の縦断をやりたいんだという、そういうやりたいという気持ちが一番最初に出たと思いません。

それでそれをやった中から何か持ち帰ればいいんじゃないか、人がはいられない地域にはいつて行くんだから、それぞれの専門分野の人たちに持ち帰るものがあればいいんじゃないか、というようなことで、自分の行動を中心としてできる範囲のこと、例えば名古屋大学の水圏科学研究所のほうですけれども、その雪水関係で、五十キロ毎に水を回収していくとか、それから雪のサンプルを雪が降った時には必ず採る、というようなことをやったりする。それからもう一つ、空気のサンプルを五百キロ毎に採って行くというようなことです。まあ人はいらない所に行くんだから、そういうことで、かえって足しになればいいということとであります。

実際に私、この地図の違いというのははっきり発見されましたし、もう一つは、白クマと標高千

七百メートルのグリーンランドの内陸でもって出会っている。白クマというのは、北極海沿岸にいるアザラシを常食としている動物ですけれども、グリーンランドのあの内陸にも白クマがいるということとは、何か交流があるんじゃないかということとは、私が白クマに出会ったことからして十分考えられると思う。一つの説かも知れませんが、そういったこともあります。そういうものが結果として現れたということなんです。

●司会 はい、ほかにありますか。

●岩本隆一郎（早大理工学部一年・西寮）犬ぞりで行ったわけなんですけれども、犬ぞりでなくてはいけないという必然性はあったんですか。スノーモービルとか……。

●植村 いや、そういうことは全然ありません。もし好きならスノーモービルでやればいいんじゃないかと。何であつてもいいと思うんです。山に登っているから、山をやらなくちゃいけないとか、極地をやっているから、極地をやらなくちゃいけないとか、そういう気持ちは全くありません。とにかく自分の一番やりたいものを、そのものを一本に絞ってきてやったら。それで極地にはいつてくれば、だんだん極地の知識というのが湧いてきます。ふくらんできます。そういうことで、犬ぞりというものが進んできたものでありまして、そのスクーターについては、私自身何の興味もありません。

●司会 はい、ほかに。どうぞ。

●大西慶三（早大政経学部一年・西寮）先生は人間としてのぎりぎりの状態に体をおかれた時、例えば白クマに襲われた時だろうが、そりが海中に沈んでしまった時だろうが、そんな時に、先生は神様っていうもの——キリストでも、仏様でも何でもいいが——があるとおっしゃいますけれど、それが果たして自分自身の中から芽ばえるものなのか、自分を越えたものなのか、そこらへんについて先生はどうお考えですか。

●植村 いや、私には全然解りません。但し苦しい時の神だのみでありまして、それがすぎてしまうと、またすぐ忘れてしまう。これはアマゾンを下っている時にはやっぱり神というものを意識しました。例えばアマゾン川のところどころにはミッシン（宣教団）が建てたキリストの十字架があります。部落があれば必ずといっていいほどあります。そしてそこを通りますと、無意識のうちには何となしにやっぱりに神に自分の安全をすがるという状況がありました。それ以外は私にはもうわかりません。結局、それは自分の心の弱みが神にすがるものじゃなかったかと思えます。もしそれで耐えられる能力を持つておれば、その神というものには、私に生まれて来なかったんじゃないかと思えます。しかし本当言いますと、神への、そういったものへの感謝の気持ちを持ってなくてはいけないと思うんですけど、ちよつとわかりませんで

すね。

●司会 さて、この辺で聴講されている方に、一つ二つ質問を出して頂きたいと思えます。どなたかこういうことを聞きたいという方がいらつしやいますでしょうか。どうぞですか。メンバーの方でもいいですよ。じゃあ、はいどうぞ。近くのマイクをお使い下さい。

●高橋道夫（早大文学部三年・西寮）アザラシの生肉を食べて、それを食料として、横断の途中の食料として行ったという先生のお話でしたが、ちよつと聞いたんですけども、何かすごく生臭くて、ちよつと普通の人には食べられないという感じでしたが、それが食べられるというのは、やっぱり訓練したというか、そのへんのことちよつとお聞きしたいんですけど……。

●植村 いやこれは実は、何でも食べられると思うんですけど。私は自分の垂らした糞でも食べられるようになるんじゃないかと思うんです。犬を見ておきますと、同じ食料が三日ぐらいなくなりまして、自分で振り向いて、ペロツと自分の糞を食べておりますし、まあ私自身にはそういうことは起きませんでしたけれども、本当に選ぶものがなくなつてきますと、そういう生臭さも何もなくなつてきます。

最初、生肉を食べましたのは、単身グリーンランドの最北の部落にはいり、一年間生活した時で、いきなり肉なんか出されたとき、これはも

うアザラシの肉なのか、セイウチの肉なのか、他の何の肉なのか、やっぱり原形がないから解らない時ですね。食べないと彼らに受け入れてもらえないと思つて、もう食べるわけです。そうすると生肉、生臭いというか、非常に奇妙な感じがするわけです。でも最初はそういうものであつたんですが、もう二日三日となつてくると、また生活に慣れてきますと、アザラシはこういった味だ、セイウチはこういった味だ、またアザラシの中で脳みそはこういった味だ、心臓はこうだ、腸はこうだという感じで、一つ一つ味が解るようになってきますと、逆にそういったものを一つ一つ味わうことができるようになり、別に何も意識することなく食べられます。例えばアマゾンの中にはいりますと、バナナがあります。バナナは青いバナナです。それは全蔗糖分がはいつておりませんです。こういったものでも原地にはいると、例えば焼いて食べたり、ゆでて食べたり、煮てたべたり、フライにして食べたり、つぶしてべた焼きにして食べたりで、我々が米を調理するのと同じような感じでありまして、我々は意外と食べないで頭で考える。

それからもう一つ、我々の非常に恵まれた社会では、特に東京なんかは季節には関係なく、沢山食べたいものがお金でもって食べられる。そうした時に、やっぱりそれぞれ好き嫌いがありますものですから、これは食べられない、これは食べら

れる、とそういう中には、やっぱりしかたないと
 そういうものは感じます。私だって、そこに生肉
 があるから、すぐに食べられるかといえ、やっ
 ぱり日本のあたたかい飯だとか塩辛みたいなのが
 あると、このほうがおいしいんじゃないかとい
 う気持ちになりますし、その地に入れば、まあ従え
 ばいいんじゃないかと、そういうものですね。
 ●司会 はい、他にありませんか。どうか
 聴衆の方、またはメンバーの方。できたら聴衆の
 方。はい、どうぞ。

●鈴木明（日大文学部一年・西寮 日大の者なん
 ですけれども、あの日大隊と何か競争みたいに雑
 誌なんかではとられているようなんですけど、
 日大隊に先を越されたというか、まあ日大隊に対
 してはどのように思っていますか。

●植村 まあ、私としては、それぞれやっており
 まして、出発点も違って、結局入る時に一時べー
 スキャンプで一緒になったぐらいでありまして、
 行動は全く別でありました。極点に到達しまし
 た時には、一日先に日大隊が着いた後でありまし
 た。まあ幾分かずれていましたんですけど、その時
 の私の気持ちとしては、本当にくやしいといいま
 すか、残念だったという気持ちはしました。行動
 中にも、日大隊には負けたくないという気持ち
 はつきり持っていました。そしてまた協力しても
 らった人には、極点に着きました時にすぐによ
 日大隊に負けまして申し訳ございませんです、と

冒頭に書いております。

まあ、自分で後半にグリーンランドの縦断を、
 実は前人未踏の三千キロの縦断のルートを持つて
 おりましたもんですから、もうこれでもって取り
 返しを仕返ししようという気持ちを持たしてくれ
 ております。内心本当に負けたくない気持ちでし
 た。まあそういうところですね。でも、我々は
 日大隊とは常に出発する前からお互いの交流を持
 って準備をしあつてきておりましたんで、何か関
 係がこじれたかというようなことは全くありませ
 んです。

●司会 はい、そろそろ時間もなくなつてしま
 したんで、これからの先生の日程など、予定などが
 ありましたらお聞きして、これでセミナーのほう
 は終わりたいと思います。何かありましたら、こ
 れからの予定など、どうぞ。

責任の転嫁はいけない

●植村 ちょっとこのことを申しておきたいとい
 うことを今感じましたんですが、その前に責任の
 転嫁というのは絶対にいけないんじゃないかと思
 うんです。親が悪いんだとか、先生が悪いとか、
 人に責任を転嫁するのは、私は一番卑怯なやり方
 だという気持ちです。今何かそういう
 ような風潮が高いような感じがしますけれど、
 我々生まれてくれば、その人は自分にすべて責任
 があつて、他人が取ってくれるもんじゃな

うことを思うんです。そういうことからして、自
 分の行動に対しては自分が絶対責任をとらなくち
 やいけない。ところが何か障害にぶち当たります
 と、人がこうやったからとか、何かのためにでき
 なかつたんだとかいうような他に責任を転嫁する
 というようなことは、私は行動の中で一番卑怯な
 やり方だという気持ちを持っております。

至上は金でも生活でもない

それからもう一つ、自分の生き方の中で、どん
 なふうな生き方をしてもいいんじゃないか。皆さ
 んは当たり前とおっしゃるかもしれませんが、私
 はこの世の中はお金ですべてじゃないと思いま
 す。我々よりもっとエスキモーの人たちのほうが心
 が豊かな生活をしている感じも受けました。我々
 は、人が自分よりもお金を多く持っている、何
 となしにあの野郎お金を持っているとか、もつと
 いい生活をしがたつてとか、そういうような気持
 ちが無意識のうちに浮かんでしまふ、私自身がそ
 うであります。ところがエスキモーには、そうい
 うものはありません。何かお金が、貨幣経済
 がすべてをそういうように結びつけているような
 感じもします。エスキモーの中での一つの生活と
 いうのは、むしろ食料を持つている人は、持つて
 いない人に分け与える。持つてない人は、持つて
 いる人から貰えばいいというような意外と共同社
 会してみても、お互いが結ばれている。ところが、こ

ちらでの社会というのは、もう自分だけがよければいいんだという考え方だ。例えば、何といいますか、原始社会と云ったらおかしいですけども、文明から遠ざかっていけばいくほど、何かそういうものに対して、非常に厳しいものがある感じがします。ところが我々はこういった恵まれた社会においては、病氣すれば誰かが助けてくれる。或は何かになれば、常に社会というものが保障してくれる。そういう中に個人主義というのか、利己主義というのか、そういうものが高まってきているような感じもします。私はそういうものに対しては、あまり好ましく思いません。

平等の権利で欲する生き方をする中にも モラルがある

でもそういった中にも、我々個々一人一人が生きていく権利があるような感じがします。頭がなくても、やっぱり自分で、その場でもってやりたいことを自分の方向で、ふり返ってみてよくやったなと満足すれば、それでいいんじゃないかと、私は思います。社長がえらくて、平がえらくないとか、また、お金のある人がえらくて、お金のない人がえらくないとか、そういうような物の見方は、私にはあまりいけないような感じもするんです。まあ、これから先、私自身も何をやるのかわかりません。すでに私も、一番最初アメリカにとび出しました時に、まず生活程度の高いアメリカでお金

を稼ごうということを考えました。片道切符でもって移民船でアメリカにはいった時に、ポケットには四万円しか持ってなかつたんですが、このお金をドルに換えたら、百十ドルというお金だったんです。そういった中でアルバイトしている時に、私は観光ビザで働いておりましたもんですから、実はブタ箱にぶち込まれました。でも自分で何としても山に登りたいが故に、日曜日も祭日も返上して、もう必死にお金をためていました。そういった状況の中で、悪いことをしたという気持ちは沸いてはきませんでした。そういったことで取調べを受けたときに、本当に自分の気持ちを全部通訳を通して伝えましたところ、強制送還を免れてヨーロッパにはいられたのですけれども、これも本当に自分でどうこういうわけではありませんが、本当に自分でいいと思えば、私にはもう何をしてもいいんじゃないかという気持ちもあります。まあしかし、何と云いますか、これから先、お金も上げが自分で一番満足だと思えば、人が何を言おうと、がめつくやればいいと思いますし、それからまた、女遊びが一番満足だと思えば、人が何を言おうとも、自分で堂々とやればいい。しかし我々この社会の中での一つのモラルというものがありませんで、そういうものを守ったものであればいいと思うんです。ところがこのモラルっていうのは、やっぱりこれは日本のモラルであって、一歩外国に出れば、日本のものとはまた違う

ものがある。エスキモー部落にはいけば、エスキモーのモラルがある。じゃあ我々の考えがすべてエスキモーに通じるかといえれば、そこにはかなり違うものがありますんで、やっぱり自分の本当にやりたいものの中で、その社会で迷惑をかけなければ、何をやってもいいんじゃないかという気持ちを持ちます。まあ私もこれから先何をやるのかわかりませんですけども、当面は今年の冬、エベレストをやるうということを考えております。厳冬のエベレスト、果たしてできるかどうかわかりませんが、今までの経験を土台にすれば、何か可能性があるんじゃないか。まだ現在では五〇パーセント以下の確率だ。まあこれをこれから先、明後日ですけども、ヒマラヤに再度入って行って、少し調査とトレーニングをして、五月の末に帰ってくる。それからまた七月八月には、今度は七千メートル前後の南米の最高峰のアコンカグアに、冬のアコンカグアにいつて登山をして、それからエベレストの八千メートルに挑もうというようなことを考えてやってきました。まあ果たしてできるかどうか解りませんが、これは私の生き方として、まあせい一ぱいやつてきているものであります。以上です。どうも長い間ご静聴下さいました。

●司会 本日の和敬セミナー、植村先生をお迎えいたしました。無事に開くことができました。今後とも先生のご無事な旅をお祈りしたいと思います。

す。そして先生からいただきました貴重なお言葉を、これから私たち塾生と共に座右の銘にしたいと思います。もう一度拍手をお願いします。(拍手)
どうもありがとうございます。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。